

## 学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者名 杉山 佳菜子

論文題名

青年・成人の介護・扶養意識に関する心理的要因の検討

(論文内容の要旨)

(A4サイズ、800字前後、5～6頁を目安にして作成してください。通し頁を入れて下さい。)

# 学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者 杉山 佳菜子

論文題目

青年・成人の介護・扶養意識に関する心理的要因の検討

(論文内容の要旨)

## 第1章 問題および目的

日本の家族は様々な解決困難な問題を抱えている。例えば、晩婚化に伴う少子化、離婚や家族の離散、家庭内暴力、高齢化と単独世帯の増加、不公平な家事労働や介護の担い手などの問題がある。中でも、少子高齢化やそれに伴う介護の担い手の問題は、日本社会の急速な高齢化に伴い、解決が急務な問題である。

子世代と親世代が同居しないという、子世代の世帯独立が進んでいる一方で、介護の政策では家族としてのつながりを求めるような政策も取られている。日本の高齢者福祉に関する施策がゴールドプラン、新ゴールドプラン、ゴールドプラン 21 と改定されていく中で、特別養護老人ホームなどの施設中心で行われている介護から、在宅・地域を中心にするものにシフトしてきており、地域住民や家族が高齢者介護において重要な役割を担うようになってきた。また、2014年の介護保険制度の改正によって、介護、医療、生活支援、介護予防を充実させるという、地域包括ケアシステムの構築を目指すようになり、家族の果たす役割は大きくなってきているといえる。つまり、家族成員がどのように介護・扶養をしていくのかについて積極的に考えていかなければならない。

したがって、実際に介護・扶養を担う世代のみならず、今後の家族介護の問題にどう対処していくのか、経済的な備えや心構えなども必要になるため、将来の介護・扶養の担い手である青年も含めてどのように考えているのか、どのような問題意識を持っているのかについて、研究が必要である。しかし、介護問題の研究は実際に介護に携わる人の負担感や継続意思の研究がほとんどであり、今後介護を担う世代の介護に対する意識の研究は少ない。また、性別や出生順位、年収、職業などの人口統計学的要因を中心に介護・扶養意識が研究されており、心理的要因を検討した研究は少な

い。扶養意識については、青年期を対象に行われているが、介護負担感と同じく、性別、職業、地域特性、学歴などの人口統計学的要因から検討された研究が多くなっている。しかし、高齢者福祉施策が家族介護中心の施策へと変化している現代においては、親子関係やパーソナリティなどの心理的変数も含めた介護・扶養意識の研究も必要であると考えられる。

本論文においては、介護負担感と扶養意識を以下のように定義する。

介護負担感について、涌井（2021）は、介護を担うことによって家族介護者が受ける負の側面である **Burden** を「負担」とし、特に主観的・精神的に家族介護者が感じる負担を「介護負担感」として定義した。本論文では、涌井（2021）の定義に依拠し、実際に介護をした結果の負担感だけでなく、予測される負担への評価も介護負担感として研究を進める。

扶養意識について、特に定義がない場合は実親に対する扶養意識を扱う。先行研究の定義を概観すると、どの研究においても具体的な「経済」「身体」の援助に加え、精神的なサポートとその動機づけとなる「意識」が軸となっていた。したがって本論文においては、扶養意識を精神的な扶養、経済的な扶養、身体的な扶養（介護）の3つの側面の親に対する扶養に対する意識として研究をすすめていく。また、特に指定しない場合は実親に対しての扶養意識を想定し、義理の親と実の親に対して区別する場合はその旨記載する。

前述のように、これまでの介護負担感研究は、実際の介護従事者の負担感を扱うことが多く、青年期や成人期の、まだ介護を行ったことのない者への介護負担感イメージや、親への扶養意識を扱った研究は少ない。また、介護負担感や扶養意識を説明する変数として年収や職業などの人口統計学的要因からの検討であり、心理学的要因を検討した研究は少ないため、本論文では心理学的変数に着目する。調査対象者とデータ収集の時期について、本論文では、介護保険制度の導入により、介護問題の中で家族の役割が増すとともに、この問題についてメディアで盛んに取り上げられるようになった 2000 年代前半の主介護者ではない青年期や成人期を対象に、将来予想される介護負担感や扶養意識を扱った。2000 年代はこれまで介護問題には無関心でいられた青年や初期成人期にとっても身近な話題となった時期であるため、この年代に焦点を当てる。本論文は4つの研究から青年・成人の介護・扶養意識に関する心理的要因を検討する。

第2章では青年期の親子関係との関連を検討する。第3章では、成人期の義理の親も含めた親子関係から検討する。実際の介護者を対象とした研究では、介護をするまでの要介護者との人間関係が介護負担感に影響を与えていた(林, 2000)。このことから親に対して介護・扶養を積極的にしたいと思うかどうかは、それまでの関係性が影響を与えることが予想される。さらに、これまでの扶養意識の研究は、実の親に対する意識が扱われており、義理の親に対する意識は明らかにされていない。そこで第3章では実親に対してだけでなく、義理の親に対しての扶養意識を明らかにし、実の親への扶養意識との比較を行う。

第4章では、自己犠牲的か自己優先的かという意識から検討する。大学生は家族への献身場面での自己犠牲の意思決定を自分優先の自己決定よりも大切であると考えており、個人の自己実現よりも家族との関係や家族の一員としての役割とそれに付随する責任の遂行を重要視することが示唆されている(首藤・二宮・崔・藺・金, 2002)。この結果から、大学生は家族の介護・扶養場面では自己犠牲的な行動をとることが予想されるが、介護や扶養への関心との関連は分析されていない。そこで、自己犠牲的／自己優先的な意思決定の背景に介護・扶養意識があると仮定し、自己犠牲的か・自己優先的かという意識と介護・扶養意識の関連を検討する。

第5章では介護・扶養の問題に対する個人→道徳領域判断を検討する。本来高齢の親の介護や扶養をするかどうかは個人が自由に決められるべき問題だが、日本では明治憲法下で「家制度」が定められていたことにより、長男が同居し、高齢の親の面倒をみるということが当然であるという考え方が残っていることが推測される。そこで、介護・扶養の問題を個人→道徳の多面的領域の問題としてとらえ、青年および成人が「個人」「慣習」「道徳」のどの領域の問題として捉えているかを整理し、問題のとらえ方によって生じる、介護・扶養意識の差異を検討する。

最後にこれらの研究をまとめ、青年および成人の介護・扶養の問題の発達段階による相違点と、それに影響を与える要因を整理することを目的とする。

## 第2章 大学生の扶養意識と介護負担感

### 1. 目的

青年の扶養意識に関しては活発に研究がされているわけではない。比較的多くの研究が行われていた1980年代と今では時代背景も大きく違うので、意識も変化していることが予想される。そこで、①現代の大学生は親の扶養に対してどのような意識をもっているのか、②将来想定される介護負担感をどのようにイメージしているか。③これらについて、出生順位、親子関係や高齢者に対する知識、親の年齢との関連から検討する。最後に④将来の扶養に対して、具体的にきょうだいの誰がするのがいいと考えているのか、その理由とともに検討する。

### 2. 方法

①調査協力者：愛知県内の私立大学に在籍する1年生から4年生の大学生360名（男子189名、女子171名）。平均年齢は19.3歳（SD=.98）。

②調査時期：2005年7月中旬。

③質問紙の構成：フェイスシートで、年齢、性別、家族と同居しているかどうか、きょうだいの数・構成、「きょうだいの中で誰が親を扶養するのが望ましいか」についての自由記述とその回答の理由、祖父母との同居経験、高齢者の介護経験の有無と両親それぞれに対する満足度（5「非常に満足」から1「非常に不満」、0「いない」）を質問した。親子関係については、松岡・黒石・杉山（2005）の8項目からなる親子関係のサポート項目を使用した。父母についてそれぞれ「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。

高齢者知識については、前田（1979）から抜粋した高齢者について記されている8つの問題について1「正しい」か、2「正しくない」かについて判断を求め、高齢者知識を測定した。扶養意識については、前田（1979）の項目を参考に20項目作成し、将来、高齢になった親の世話をすることをどう思うかについて、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。介護負担感については、中谷・東條（1989）の介護負担感尺度12項目の語尾を「～だろう」と変換し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの

5件法で順に5点から1点までの得点を与えた。父母それぞれについて認知症（痴呆症）にかかったり、寝たきりになったりして1人では生活できなくなった場合を想像させて回答を求めた。

### 3. 結果および考察

扶養に対する意識は「消極的扶養態度」「経済的配慮」「積極的扶養態度」の3つの因子から構成されており、経済的配慮と積極的扶養態度は一人暮らしをしている者の得点が高かった。このことから、親元を離れて生活するということは、扶養に対して積極的に考える機会になると考えられる。また、きょうだいの数が少ないと消極的扶養態度の得点が高くなっており、きょうだいの数は扶養に義務的な感覚をあたえ、モチベーションが下がるのではないかと推測される。母親からのサポート量は扶養意識全体に大きな影響を与え、サポートの量が多いほど積極的な考えを持つようになる。また、父親からも十分なサポートを受けるということは、より積極的な意識につながるようである。現在のサポートという点における親子関係が良好であるということは、将来の扶養の心構えにつながると考えられる。

介護負担に対するイメージは、父親に対しても母親に対しても大きな差はみられず、日常生活や疲労に関する項目に負荷が高かった。扶養の担い手に対し、正しい知識を与えるとともに、日常生活の負担軽減のための制度の充実も必要不可欠だと思われる。扶養意識と介護負担感には相関がみられ、介護負担感を扶養意識の1つの側面と捉えることができる。父の介護負担感は父親への満足度、父親からのサポートと、母の介護負担感は母親からのサポートと関係していた。したがって、現在の親子関係が良好であれば、介護負担を軽く予想しているといえる。やはり、現在の親子関係が良い、ということは扶養に対して積極的かつ、負担も軽いと考えさせるようである。また、きょうだいの数が父母どちらの介護負担感にも影響しており、きょうだいを介護の担い手として期待し、自分の負担を少なく予想するのではないかと考える。

将来親の扶養をするのは誰がふさわしいかという質問に対しては、「自分」と「長男」の回答が多かった。主な理由は出生順位であり、心理的な理由ではなかった。長男が家を継ぎ、親の扶養をするという、日本の伝統的な慣習が背景にあると考えられる。しかし、扶養者に自分をあげた者の扶養意識は自分以外をあげた者よりも積極的であった。きょうだい全員で扶養すると回答した者の理

由をみると、負担の分散やその状況に応じてできる人がするといった効率を考えたもの、親にとってもそれがいいのではないかと、といったものであった。出生順位を理由にあげた者よりも、より具体的で現実的な状況を想像した結果であった。

### 第3章 成人子とその親子関係からみる老親扶養意識

#### 1. 目的

太田・甲斐（2002）などでは実親に対しての扶養意識を測定しており、これまで義理の親に対する扶養意識は検討されていない。子が親を扶養することへの賛否を問うような一般的な扶養意識を測定するのであれば特に対象を限定する必要はないが、具体的な場面を想定した扶養意識は、親との血縁関係によって意識が変わることが想定される。第3章では成人の親子関係と扶養意識について、実親と義理の親を明確にわけて親子関係を検討し、扶養場面についても全般的な扶養意識と場面を設定した場合の扶養意識を扱う。親子関係がよい者の扶養意識が高いという先行研究の結果が支持されるかどうかについて検討する。

#### 2. 方法

①調査協力者：2006年度、愛知県内のA大学で実施した教員免許認定講習と司書講習の受講者のうち、実親・義理の親いずれかの親が生存しており、実際の介護経験がない既婚者83名（男性37名、女性46名）を分析対象とした。分析対象者は25歳～60歳で、平均年齢は40.9歳であった。なお、愛知県は高齢者同居率が低い県であり、受講者は県内の各地域から参加していた。調査対象者のうち、72名（87%）が実親・義理の親ともに生存、3名（4%）が実親のみ、7名（8%）が義理の親のみ生存していた。

②調査時期：2006年8月下旬。

③調査内容：フェイスシートで年齢、性別、自分と配偶者のきょうだいの数・構成、実親の居住地ならびに義理の親の居住地に行くまでに片道どのくらい時間がかかるかを「同居」「隣居」「30分以内」「1時間以内」「それ以上（かかる時間を記入）」で質問した。親子関係項目は「頻繁に連絡をとっている」「対等な関係である」などの10項目を実親・義理の親それぞれに対して「非常にあては

まる」から「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。全般的扶養意識20項目に対して「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。場面による扶養意識は、坂本（1990）の研究で用いられた「経済的な援助が必要になった時」、「介護が必要になった時」、「寝たきりになった時」、「一人きりになった時」という4場面において、どの程度援助しようと思うかについて尋ねた。

「同居して全面的に負担する」「全面的に負担するが同居はしない」「一部負担する」「ほとんど負担しない」「全く負担しない」で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。介護負担感は第2章の大学生への調査と同様に、「中谷・東條（1989）の介護負担感尺度12項目の語尾を「～だろう」と変換し、回答を求めた。教示は「これはある調査から得られた介護に関する意見です。これらの項目に対してあなたはどのように思いますか」とし、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。

### 3. 結果および考察

実親、義理の親を問わず、性別やきょうだい構成では親子関係にほとんど違いがみられなかった。結婚後も義理の親よりも実親との関係がより親密であり、実親との関係は義理の親との関係とも関係していた。親子関係という人間関係の基本となる関係がうまく形成できない場合、その他の人間関係にも影響を及ぼすということは、青年期までのことではなく、成人期になっても同様の傾向があることを示唆している。

全般的扶養意識は「老親自立期待因子」「情緒的支援志向因子」「伝統的扶養志向因子」の3因子から成り立っていた。進学を機に地方都市から大都市に出てきたり、仕事を求めて大都市に出てきたりするケースも多いため、大都市では核家族化がすすんでいることから、家制度が強く根付いているとは思えない現代においても、扶養意識の中には伝統的な意識が残っていた。全般的扶養意識は介護負担感と正の関連もみられた。老後のことを親自身で何とかすべきだと考える者は負担感も高く、介護を負担に感じているために親に自立を促すのか、高齢でも自立して生活すべきという考え方が負担感を高くしているのか、この関係は今後の検討課題である。

実親・義理の親の対象別、場面別に扶養意識を検討すると、実親に対する意識、義理の親に対す



る意識は男女ともに高くなっていた。実親に対しては男性においては出生順位と、女性においては親の居住地までの時間的距離が関連していた。ただし、距離については Finley, Roberts, Banahan (1988) の研究の遠くに住んでいる者ほど扶養意識は低くなるという見解とは逆の結果であった。

「経済面」に差が見られた理由として、今回の調査対象者の女性のうち 71.7% が仕事をもっており、家庭の経済状況にある程度の余裕がある可能性があることや、遠方でもできる援助であるという点が挙げられる。一方義理の親に対しては、自身の出生順位も配偶者の出生順位や親の居住地までの時間的距離は扶養意識と関連している要因ではなく、義理の親との関係が扶養意識と関連する要因であった。

以上のことから実親に対しては時間的距離やきょうだい構成のような、その人のおかれている状況が扶養意識を左右していること、義理の親には、親密な関係を築いているかどうかという心理的な要因が扶養意識の姿勢を左右する大きな要因であることが示唆される。ただし、今回の調査対象者の 84% が何らかの仕事に就いており、また、全体の 78% が教員と、大学卒業以上の高学歴であり、一般的な調査対象者としては偏りがあると言える。今回の結果が日本人全体の傾向であるとは言い難いが、高学歴化、女性の社会参加が盛んになってきた日本において、ある程度一般的な傾向と考えると良いだろう。

## 第 4 章 自己犠牲・自己優先と扶養意識

### 1. 目的

首藤・二宮 (2001) は向社会的行動や自己管理の問題では、個人の自由や自己決定権と、社会道徳的要素の両方が含まれる場面での判断と自己決定は、個人一道德(personal-moral)の問題であるとしている。介護をはじめとする親の扶養の場面では、自分の要求と家族の要求が葛藤を起こすことが予想され、この場面での自己決定は身近な個人一道德の問題と分類できる。第 4 章では親の扶養を個人一道德の問題ととらえ、自己犠牲と自己優先の意識と扶養意識について、女子青年のデータと成人女性のデータを用いて関連を検討する。

## 2. 方法

①調査協力者：＜青年データ＞愛知県内の大学で資格関連科目を受講した文系の女子学生 72 名と、看護専門学校に通う女子学生 80 名の計 152 名。平均年齢は 19.9 歳 (SD=2.9)。

＜成人データ＞愛知県内の大学で司書講習を受講した女性 93 名。平均年齢は 33.79 歳 (SD=9.46)。

②調査時期：＜青年データ＞2009 年 7 月～8 月。＜成人データ＞2009 年 7 月～8 月。

③調査項目：フェイスシートで年齢、性別について質問した。場面別の扶養の必要性について、「親が一人暮らしになった時」「親が経済的に苦しくなった時」「親に介護が必要となった時」の 3 場面で、「親が必要とすれば必要」か「親が必要としなくても必要」のどちらの考えに近いかわかるように回答してもらった。自己犠牲・自己優先の意思決定は、首藤・二宮 (2001) で使用された自己犠牲の例話と自己優先の例話を提示し、それぞれの例話に対して、「主人公の決心はどれくらい「大切」なことですか」(重要度)、自己犠牲場面：「妻は自分の仕事を犠牲にしてまで、夫の介護をすべきだと思いますか」(義務の程度) / 自己優先：「夫が妻の介護を優先させるか、仕事の成功を優先させるかは、最終的には夫が決めてよいことだと思いますか」(自己決定性)、「主人公は自分の決定にどれくらい「満足」していると思いますか」(満足度)、「主人公と同じ立場になったとしたら、主人公と同じ決心をしますか」(共感度) の 4 つの質問を行った。いずれも 4 件法で回答を求め、質問に対し肯定的な回答から順に 4 点から 1 点の得点を与えた。全般的扶養意識は杉山 (2010) の全般的扶養意識尺度 11 項目を使用した。「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求め、順に 5 点から 1 点までの得点を与えた。介護負担感、中谷・東條 (1989) の介護負担感尺度 10 項目を使用した。「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた。回答には順に 5 点から 1 点の得点を与えた。

## 3. 結果および考察

自己犠牲・自己優先の意思決定の判断については、女子青年も成人女性も、重要度では自己犠牲の行動の方が得点が高かったが、自己決定性や満足度では自己優先行動の得点が高く、自己優先の行動の方を認めていることがうかがわれた。女子青年にとっては自己を犠牲にするかどうかは重要な問題ではあるが、自己を犠牲にすることよりも自己を優先したときの方が満足感を得ている。自

分以外の人を思いやりつつも、“まずは自分”という考え方が読み取れた。また、この傾向は首藤ら（2002）の大学生の結果と同様の傾向であり、この数年では学生の自己犠牲・自己優先の特徴は変化しておらず、さらに成人と同様の傾向であることから、発達にともなった変化もないと考えられる。つまり、近年の青年が特別自己優先的になってきているとは言えない。

女子青年の扶養意識と自己犠牲・自己優先の意思決定については、「自己犠牲タイプ」も「自己優先タイプ」も同じように扶養の必要性は感じているものの、「自己優先タイプ」の方が親の扶養に消極的であり、親の自立を期待していた。成人女性の結果では、自己犠牲にも自己優先にも「どちらも共感タイプ」が親の自立を望んでいた。

女子青年の介護負担感と自己犠牲・自己優先の意思決定では、「自己優先共感タイプ」と「どちらにも共感しないタイプ」には「全体的介護負担感」が高かった。したがって自己優先的な意識よりも、自己犠牲することをどう考えるかが介護負担感と関連があると考えられる。成人女性では、自己犠牲・自己優先の共感度で判断の違いは見られなかった。

これらの結果から、青年期では自己犠牲的・自己優先的という意識が扶養や介護についての考え方に影響を与えるが、成人になるにつれその影響は少なくなっていくと言える。成人になると自己犠牲的・自己優先的という意識以外の考慮すべき文脈やこれまでの経験が加味されてくることが関係しているのではないかと考えられる。

## 第5章 社会的領域理論からみた介護・扶養意識

### 1. 目的

第4章では、介護問題を個人—道徳領域の問題として扱ったが、第5章では改めて介護・扶養の問題をどの領域の問題として判断しているかを明らかにする。研究1では、青年が高齢者介護の問題を道徳・慣習・個人のどの領域の問題と判断しているのかを明らかにするとともに、どのような介護イメージを持っているのか、自身の介護をどのように考えているのかを調べることを目的とする。研究2では、成人が高齢者介護の問題を道徳・慣習・個人のどの領域の問題と判断しているかを明らかにするとともに、自己犠牲的・自己優先的な意識との関連を検討する。研究3では、中

高大学生のデータと成人のデータを用いて、領域判断についての発達段階による変化を検討する。さらに介護負担感との関連についても年齢段階による違いを検討する。研究4では、台湾の高校生と日本の高校生の傾向を比較し、文化的な影響を検討する。

## 2. 方法

①調査協力者：＜大学生調査＞大学生 170 名（男子 90 名、女子 80 名）。

＜成人期調査＞30代～50代の成人 165 名（男子 71 名、女子 94 名）。

＜中高大成人横断調査＞中学2年 148 名（男子 73 名、女子 75 名；平成8年度生）、高校2年 132 名（男子 78 名、女子 56 名；平成5年度生）、大学1年 129 名（男子 96 名、女子 33 名；主として平成3年度生）の合計 409 名（男子 245 名、女子 164 名）。成人は成人期調査のデータを使用。

＜日台比較調査＞日本人高校生 218 名（男子 127 名、女子 91 名）、台湾人高校生 502 名（男子 242 名、女子 260 名）の計 720 名。

②調査時期：＜大学生＞2009年10月上旬。＜成人期＞2011年8月上旬。

＜中高大成人横断調査＞2010年12月から2011年1月。

＜日台比較調査＞日本では2016年1月、台湾では2016年1～2月に実施した。

③調査項目：＜大学生＞フェイスシートで性別、家族との同居状況、きょうだい構成、祖父母との同居経験、介護経験の有無を尋ねた。個人→道徳領域判断は介護・扶養場面を設定し、子ども／長男という行動の主体を変えた9項目を設定した。「個人の自由だ」、「止むを得ない時もある」、「人として絶対に許されない」の3件法で回答を求めた。介護負担感は中谷・東條（1989）の作成した介護負担感尺度10項目を使用し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた。回答には順に5点から1点の得点を与えた。自分自身が要介護になった時の意識について、「自分の子どもに世話をしてもらいたい」などの項目に対し、「もし、あなたの親が寝たきりの状態になるなど、1人では生活できなくなった場合を想像して、あなたの考えに最も当てはまる数字に○をお付け下さい。」と教示し、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法で回答を求め、4点から1点までの得点を与えた。介護イメージは「楽だ」「やりがいがある」などの13項目に対し、SD法でイメージを測定し、5点から1点の得点を与えた。

<成人期>フェイスシートで性別、年代、きょうだい構成、配偶者の有無を尋ねた。個人→道徳領域判断と介護負担感は青年期調査と同じである。その他、杉山（2010）の全般的扶養意識 11 項目について、「かなりそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。場面別の扶養の必要性について、「親が一人暮らしになった時」「親が経済的に苦しくなった時」「親に介護が必要となった時」の3場面で、「親が必要とすれば必要」か「親が必要としなくても必要」のどちらの考えに近いかを回答してもらった。

<中高大学生横断調査>フェイスシートで性別、きょうだい構成、家族との同居状況や祖父母との同居経験、介護経験の有無を尋ねた。個人→道徳領域判断は青年期調査と同じである。

<日台比較調査>フェイスシートで性別ときょうだいについて、ひとりっ子、長子、中間子、末子から回答を求めた。また、「自分は思いやりがある」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で思いやりの程度を尋ねた。個人→道徳領域判断は大学生調査と同じである。

### 3. 結果

大学生も成人も介護・扶養をするべきものだができなくても仕方ない問題と捉える者が多く、大学生と成人では判断に変化は見られなかった。また、中学・高校・大学にかけの青年期の中での領域判断に違いはないが、中学生と成人では領域判断に違いが見られ、成人は介護・扶養はするべきものだができなくても仕方ないと捉える者が多いのに対し、中学生は人として絶対にするべきものだと考える者も多かった。年齢が低いと介護扶養の問題を絶対にするべきことだと捉えていると言える。

文化的背景からの比較では、台湾の高校生は介護・扶養の問題を人として絶対にするべき問題と捉え、日本の高校生は個人の自由にしてよい問題と捉える傾向があった。台湾の高校生の方が、介護・扶養を「絶対にする必要があることだ」と考えている。

自分に介護が必要になる時を想像した時、大学生は長生きせずに、家族にも迷惑をかけないようにしたいという意識があった。さらに、介護に対して大学生は、自由ではなく、負担になるというマイナスのイメージを持っており、介護は大変で、自分の介護を家族に任せる事態にはなりたくない

いという考え方が読み取れた。

介護負担感との関連について、介護・扶養問題の個人—道徳領域判断は、介護負担感のうち、継続意思に影響を与える要因であり、個人の問題だと捉える者は継続意思が低く、人として絶対にするべきものだと捉える者は継続意思が高くなる傾向があった。この結果から介護をするかしないか自分で決定できる問題であれば回避したい、そして絶対にしなくてはならないものであれば割り切って続けていく決断をするのではないかと考えられる。

## 第6章 総合的考察

### 1. 結果のまとめ

第2章から第5章の結果をまとめると、Figure 1のように整理することができる。

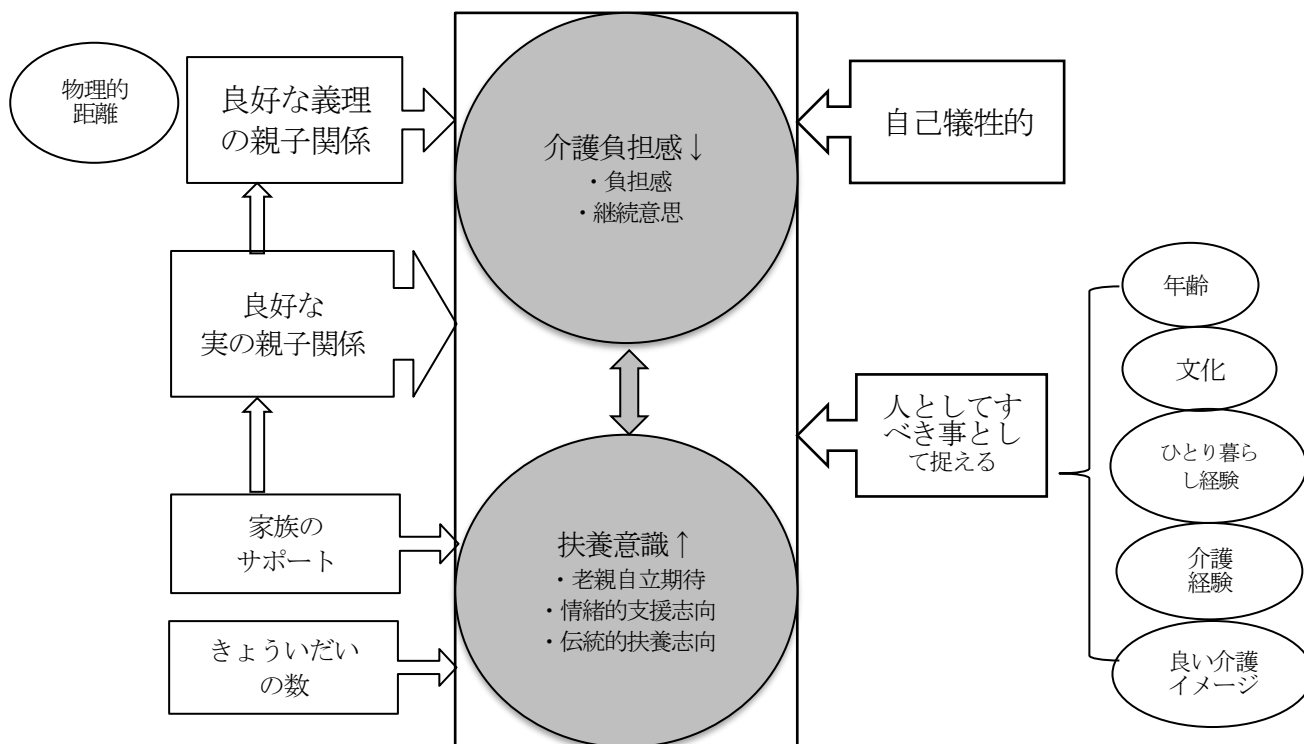


Figure 1 介護負担感・扶養意識に関連する要因

介護負担感と扶養意識には関連があり、扶養意識が高い者は介護負担感を低く見積もっていた。このことから、介護に対して過剰に負担感を想像すると、扶養することも負担に感じる事が予想されるため、まずは、介護が大変であるというイメージを変えていく必要があると言える。また、良好な親子関係が介護・扶養意識に影響を与えていた。親子関係の中でも特に、現在親か

らサポートをよく受けていると感じる者は介護負担感が低くなっていた。また、大学生では「これまで育ててもらったから」という感謝の理由が介護のモチベーションになっている者もいた。家族介護は子世代から親世代への一方的な奉仕行動となる場合が多いため、それまでにいかに親からのサポートを感じられるか、普段からどれだけ良好な関係であるかが重要であると言える。

さらに、介護・扶養の問題を人としてすべき事として捉えると、負担感が低くなることが示された。つまり、「やるべきことだ」と思っているかどうか重要であり、発達の中で介護を経験したり、年長者を敬うという考え方が根付いたりしていることで、介護・扶養問題を自然と受け入れることができ、負担感を減らすことにつながっていると考察する。

## 2. 本論文からの提言

地域包括ケアシステムの構築が急がれており、ますます家族による扶養・介護が重要となっている。したがって、家族が過剰な負担感を感じることなく、扶養・介護に前向きに取り組めるような基盤を作ることが大切であると考え。本論文では、介護をネガティブに捉えると、扶養意識に影響し、それには親子関係の良好さと介護・扶養の問題を人としてすべき事として捉えるかどうか鍵になると結論付けることができる。このことから、以下の2点を提言する。

### ① 介護知識の教育と対話の機会

介護に対して過剰に負担感を想像すると、扶養することも負担に感じる事が予想されるため、まずは、介護の知識を正しく持つ必要がある。本論文では、大学生は全体として介護に対してネガティブなイメージを持っていることが示された。さらに実際に介護経験のある学生とない学生を比べると、介護経験のない学生の方がよりネガティブなイメージを持っていた。このことから、介護に対する知識がなければ必要以上にネガティブなイメージをもち、介護を負担に感じるようになることが予想される。そこで、介護をすることでどの程度の負担が生じるのか、実際にどのようなサービスが受けられるのか、家族介護のメリット・デメリット等の情報を容易に入手できるように、また介護がすべての人にとって身近な話題となる必要があると考える。例えば、青年期に自分キャリアデザインを構築する中で、どこでどんな働き方をしたいかということとともに、家

族との関係をどう保っていくかも想像し、それを気軽に話し合えるようになることが理想である。ライフプランの中でいずれかの方法で介護や扶養にかかわることは「当たり前のこと」として捉えられるようになると、必要以上の負担感を抱かずに、介護や扶養に向き合っていけると考える。

## ②介護・扶養意識の見直し

一方で、扶養意識が高いことがよいことであるかどうかとも考えていく必要がある。秋山・大塚・森・星野（2017）でスウェーデンでは、介護はケアであり、これは社会福祉制度で行い、日常生活のサポートを家族がするという割り切った考え方をしていることが指摘されていた。日本においても、特に介護については、家族がやるべきことと福祉サービスで担うことの棲み分けをし、日本全体として介護・扶養と家族の在り方の考え方を柔軟に変えていくことも大切だと考える。

## 3. 今後の課題

本論文では、主に親子関係、自己犠牲・自己優先的の意識、個人→道徳領域判断から介護・扶養問題について分析したが、親子関係以外の2つの変数については介護・扶養意識との関係性がはっきりとは示されなかった。また、介護・扶養問題を行わないことについて、一定数が人として絶対に許されない問題と判断していることからわかるように、この問題に対して消極的であるという回答はしにくく、「社会的望ましさ」を反映したものになっている可能性がある。この問題を解決するためには、量的データのみでなく、質的なデータの分析も必要である。面接法による調査により、判断の理由や個人の文脈を丁寧に分析し、介護・扶養意識を説明する変数を検討していきたい。また、介護場面の場面設定や使用する例話の精査も必要である。

その他、文化や地域特性は介護・扶養意識に大きな影響を与える要因であると考えられるが、本論文ではこの点については扱わなかった。文化・地域特性を考慮した調査を行い、その文化や地域をどのように認知しているかということも含め、今後は研究を行ってきたい。また宗教性や社会制度の違う諸外国との比較も今後の課題である。



## 引用文献

- 秋山美栄子・大塚明子・森恭子・星野晴彦 (2017). スウェーデンと比較した日本の老年期イメージと家族観の考察 人間科学研究, 39, 115-127.
- 電通 (2005). 高齢の親を持つ子どもの親の高齢化・介護に関する意識調査  
<https://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2009075-1109.pdf> (2021.11.20)
- Finley,N.J., Roberts, M.D.,& Banahan,B. F. (1988). Motivators and inhibitors of attitude of filial obligation toward aging parents. *The Gerontologist*, 28 (1), 73-78.
- 林葉子 (2000). 在宅介護における主介護者のパーソナリティと介護負担感との関係 生活社会科学 学術研究, 7, 51-63.
- 前田大作 (1979). 大都市青壮年の老人観および老親に対する責任意識 社会老年学, 10, 3-22.
- 松岡陽子・黒石憲洋・杉山佳菜子 (2005). 老年移行期の“子親関係” (1) —提供されるサポート・安全基地について— 日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集, 199.
- 中谷陽明・東條光雅 (1989). 家族介護者の受ける負担—負担感の測定と要因分析— 社会老年学, 29, 27-36.
- 太田美緒・甲斐一郎 (2002). 老親扶養義務感尺度の開発 社会福祉学, 42(2), 130 - 138.
- 坂本佳鶴恵 (1990). 扶養規範の構造分析—高齢者扶養意識の現在— 家族社会学, 2, 57-69.
- 総務省 令和 2 年版 高齢社会白書 [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1\\_1\\_3.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_3.html) (2021.11.15)
- 杉山佳菜子 (2010). 成人子とその親子関係—子世代からみた老親扶養意識を中心に— 老年社会科学, 31(4), 458-469.
- 首藤敏元・二宮克美 (2001). 個人道徳の発達に関する研究 (2) 家族関係における自己犠牲と自己優先 日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集, 15.
- 首藤 敏元・二宮 克美・崔 順子・藺 桂瑞・金 順子 (2002). 個人道徳の発達に関する研究(8) 家族関係における自己犠牲と自己決定 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 4.
- 涌井智子 (2021). 在宅介護における家族介護者の負担感規程要因 社会保障研究, 6(1),33-44.

